

9月に収穫した「ただけ」の新米



厚真で安全な米、農家の未来託す

厚真町で4代続く農家の岩崎豊文さん(37)、愛美さん(37)夫妻は、低農薬米の生産に力を入れている。安全な食の提供と農村地域の活性化を掲げる取り組みに共感の輪が広がり、地元の農家や酪農家、スポーツプロデューサーが賛同。トップアスリートによる食の重要性発信などを通じ、ブランド米「ただけ」をPRしている。

岩崎豊文さん 愛美さん夫妻

低農薬米生産に挑戦

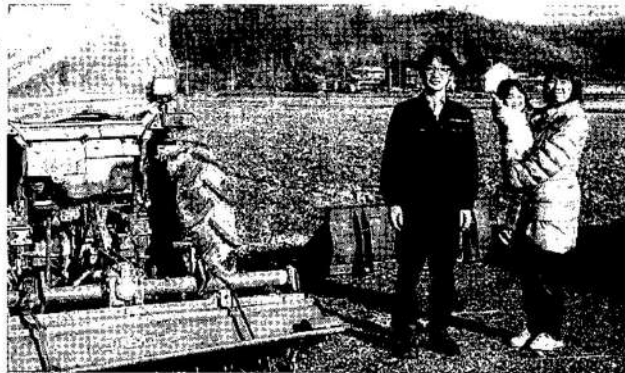
挑戦の始まりは3年前、結婚を機に札幌から厚真に移住した愛美さんが、農業の現場で当たり前に使われる農薬を目の当たりにしたことだった。

「子どもたちに安全な米を食べてもらいたい」。豊文さんは、その思いを受け止め、家族総出で挑戦を決意。農薬と化学肥料の使用を半分以下に抑えた「ただけ」の生産に乗り出した。

農薬を減らす栽培は病害虫や雑草との戦いで、日々の細やかな観察が欠かせない。販路開拓も手探りで始めたが、少しずつ消費者の心をつかんでいった。

その共感の輪が、思わぬ形で強力な仲間を引き寄せた。アスリート育成のプロフェッショナルでノヴェル(本社・札幌)の工藤佳人代表だ。スノーボードの練習場運営のほか、冬季五輪で金メダリストの平野歩夢選手を指導するなど、トップアスリートのプロデュースに長年携わった実績を持つ。

出会いのきっかけは、



厚真町で低農薬米を生産する岩崎夫妻

工藤代表と豊文さんの母・恵美さんが旧知の仲だったこと。夫妻の挑戦を知った工藤代表は「アスリートには安全な食が不可欠。そのためには農家の持続可能性が鍵となる」と共感した。これまで培ってきたプロデュース能力を生かし、協力を申し出た。

夫妻の目標は安全な米作りだけでなく、農業が抱える課題そのものに向き合うことに変わったという。愛美さんは「農業だけで暮らすのは大変。稼げる職業にならなければ、新しい担い手は生まれない」と生産現場の切実な思いを明かす。

11月から工藤代表のプロデュースで販路拡大計画がスタート。トップアスリートを通じて食の重要性や「ただけ」の価値発信、食への意識が高いレストランやシェフへのアプローチ…。ふるさと納税の返礼品登録やホームページの構築も進め、多角的な販路を確保する考えだ。

生産設備の刷新を目的とした納屋や倉庫の改築も進めている。直売所や体験スペースを設ける構想で、ノヴェルが施設整備をプロデュースする。食への理解を深める交流拠点の役割を目指す。

豊文さんは「地域全体で良い流れをつくりたい」と力を込める。町内でも夫妻の思いに賛同する農家や酪農家が現れ、厚真町産の食材を一緒にPRしていくと、さまざまな取り組みを構想している。

スポーツプロデューサーが賛同 販路拡大へ